

京都大学	博士(地球環境学)	氏名	Faris Salman
論文題目	Knowledge as Leverage of Land Governance Transformation The case of palm oil plantation (土地ガバナンスの転換における梃子としての知識：油やし農園の事例)		
(論文内容の要旨)			
本論文は、知識がいかに持続不可能な土地管理と持続可能な慣行の採用を制限する土地利用ガバナンスの経路依存性の克服に寄与するかを、インドネシア持続可能なパーム油 (ISPO) 政策の策定を事例として検討したもので、6章で構成される。 第1章は、序論であり、土地ガバナンスにおける経路依存性が、持続不可能な土地管理を固定化し、持続可能な慣行の採用を制限していると問題を定式化した。その上で、移行における知識とアクターの役割等を先行研究に基づいて整理し、「知識がどのように土地ガバナンスの移行に相互作用を及ぼすか」をリサーチ・クエスチョンとして提示した。 第2章は、土地ガバナンスの経路依存性を克服する機会と移行経路を定式化し、分析枠組みとして提示した。社会技術システム(socio-technical system)、社会生態システム(socio-ecological system)の移行経路、及び持続可能性に向けた構造転換(sustainable transformation)に関する文献レビューと文脈分析を行い、それらを組み合わせて、仮説的な土地ガバナンス移行経路と、移行経路における知識の役割に関する仮説を提示した。 第3章は、知識とアクターが土地ガバナンスの移行プロセスに及ぼす影響に関する実証研究を行った。ISPO政策策定プロセスを事例として、文献調査及び聞き取り調査により資料収集を行い、第2章で構築した分析枠組みを用いて分析を行った。この結果、政府や既得権益集団は、NGOとの知識共創を行うことで認識を変え、土地ガバナンスの移行をもたらすISPO政策の策定を可能にしたことを明らかにした。 第4章は、知識の生産及び共有が土地ガバナンスの移行経路にどのような影響を及ぼすかを、体系的文献レビューに基づいて解明した。具体的には、トリガー(引き金)が経路依存性を破壊する機会を提供し、戦略的アクターが影響力の手段(agency)を行使し、影響力を最大化できるポイント(leverage point)で介入することが、移行経路に決定的な影響を及ぼすことを明らかにした。 第5章は、第3章と第4章の分析で得られた知見を基に、第2章で提示した仮説を検証した。結果、土地ガバナンスの移行経路に関する仮説は妥当であること、しかし知識の役割に関しては妥当性を証明するだけの十分な証拠が得られず、検証は将来の課題として残されると結論付けられた。 第6章は結論であり、各章で示された主要な成果をまとめ、考察を加えて本論文の地球環境学における意義を述べている。			

(論文審査の結果の要旨)

土地ガバナンスの経路依存性は、持続不可能な土地管理を固定化し、持続可能な慣行の採用を制限する。経路依存性は、既得権益団体や影響力の強いアクターに有利になるように伝統的に意思決定が行われ、それによって統治の方向性が形成されることによって発生する。このため、経路依存性の克服は、技術イノベーションのみでは困難であり、社会イノベーションが必要とされる。

本論文は、社会イノベーションの駆動装置及び移行(トランジション)経路影響要因としての知識の役割に着目し、知識の生産と共有が持続不可能な土地管理と持続可能な慣行の採用を制限する土地利用ガバナンスの経路依存性の克服にどのように寄与するかを、インドネシアの持続可能なパーム油政策の策定を事例として分析した。

本論文の学術的な貢献は、下記2点に纏められる。第1に、土地ガバナンスの移行経路を、社会技術システム(socio-technical system)及び社会生態システム(socio-ecological system)の移行研究を踏まえて定式化し、分析枠組みとして提示したことである。その上で、土地ガバナンスの移行の契機は、社会技術システム移行論と韻を踏んでいること、即ち、社会紛争や経済発展が契機となって不安定化し、安定化のために変革を容認することになることを明らかにした。社会技術システム移行論の先行研究は新技術の開発・普及メカニズムに、社会生態システム移行論の先行研究は、システムや慣習、行動の抜本的転換(transformative change)の分析に焦点が当てられており、土地ガバナンス移行における知識生産、特に既得権利益団体と生産の担い手、NGOとの共創の役割は十分に分析されてこなかった。

第2に、誰が知識を作り出し、誰がどのようにその知識を移行プロセス、政策決定者、利害関係者の共有知識としたかが、土地ガバナンスの移行経路に決定的な影響を及ぼすことを明らかにした点である。特に、戦略アクターによる、影響力を行使する手段(agency)と影響力を最大化できるポイント(leverage point)の選択が、移行経路に決定的な影響を及ぼすことを明らかにした。社会生態システム移行論やガバナンス移行論の先行研究では、新たな知見や認識の共有がガバナンスの変化に影響を及ぼすことは、個別の実証研究から明らかにされていたものの、土地ガバナンスの移行経路に及ぼす影響として理論的・体系的に理解されていなかった。

この2点の学術的な貢献は、知識を起点とした土地ガバナンスの経路依存性の克服、ひいては持続不可能な土地管理の改善や、持続可能な慣行の採用を促すガバナンスの移行に理論的示唆を与えた点で、地球環境学における意義を認めることができる。また、学術界や市民団体、NGO等による土地ガバナンス改革運動に示唆を与えうるという点で、社会的な意義やインパクトも看過できない。

以上により、本研究は地球環境学の発展に大きく貢献する優れた論文と評価される。よって本論文は博士(地球環境学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、2024年6月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。